

もくじ

会長挨拶	1
生理人類学あれこれ(5)	3
フロンティアミーティング(FM)開催報告	7
FM シンポジウム開催報告	9
第 84 回大会終了報告	10
第 83 回大会優秀発表賞受賞者のことば	11
第 85 回大会(杏林大学)案内(第 1 報)	15
学会動静・編集後記	16

■会長挨拶

樋口重和(九州大学)

この度、2023 年 6 月から日本生理人類学会の会長に就任いたしました。前学会長の安河内朗先生からバトンを受け継ぎます。これから 2 年間、どうかよろしくお願いたします。本学会は 1978 年に生理人類学懇話会として発足し、その後名称の変更などを経て今年で 45 年目を迎えます(詳細な歴史は学会ホームページ「日本生理人類学について」(<https://jspa.net/about>)をご覧ください)。私自身は大学 4 年生の時に初めて学術大会に参加し(第 26 回大会)、気が付けば 30 年くらいの年月を学会とともに過ごしてきました。学会の組織運営とかかわりは、若手の会からスタートし、理事になってからも様々な担当をさせていただきました。今後は会長として、学会のために尽力したいと思っております。

学会の目的について、様々なご意見はあると思いますが、その分野の学問の探究と発展を目指し、その成果を社会に還元することが重要であることは言うまでもありません。また、学会の活動は会員の皆様の会費によって支えられていますので、会員サービスを如何に充実させるかということも重要な課題です。そして、これらの二つを両立させるための学会の役割は、1) 会員が研究成果を発表できる場を多く設けること、2) 会員同士の交流ができる場を多く設けること、3) 会員にとって重要な情報をできるだけ発信することだと感じています。

具体的には学術大会の開催があります。今年の 6 月に福岡で第 84 回大会が開催されました。久しぶりの完全対面の大会となりました。会場には活気が戻り、活発な質疑が繰り広げられ、学会のもつエネルギーを改めて実感することができました。その大会についても、会員

サービスを考えたちょっとした工夫が検討されています。今までは非会員は筆頭発表者になれませんでした。第 83 回大会から、指導教員が会員であれば、非会員の学生でも筆頭で発表ができるようになりました。また、概要集は大会参加者にしか配布されていませんでしたが、第 84 回大会からは、会員であればどなたでも会員専用のマイページから全文を PDF でダウンロードできるようになりました。

また、本学会は長年にわたって年 2 回の学術大会を維持してきましたが、2020 年から年 1 回に減らし、大会の密度を高める方針に移行しました。その中で、新たな試みとして、大会前日(金曜日)にフロンティアミーティングを開催することにしました。公募型の企画で、若手の会や研究部会による自由集会的な要素があり、本大会とは違った雰囲気味わえます。一方、学会が年 1 回に減ったことは、会員にとっては成果発表を行う機会が減ったことになり、会員サービスという点では縮小したことになります。そこで、学術大会とは別の時期にもフロンティアミーティングを新しいスタイルで実施することを計画しています。少しでも多くの方に会場に足を運んでいただきたいと願っています。

次に学術雑誌の刊行があります。本学会の英文誌「Journal of Physiological Anthropology (JPA)」が今年で発刊 40 周年を迎えます。今年 6 月に公開されたインパクトファクターは、発刊以降初めて 3 を超えました。サッカーに例えると、アジア予選を突破しワールドカップ出場を果たした段階と言えるかもしれません。今後は、この水準を維持しつつ、予選リーグを突破できる実力を付けて行きたいと思っています。英文誌は早々にオープンアクセス化を実現し、出版費(Article Processing Charge: APC)は著者

が支払う形式をとっています。会員サービスという点では、筆頭著者が会員の場合は APC の割引が受けられます。そのため、積極的な投稿を呼びかけていますが、一方で JPA の掲載率は 4 割前後です。その点で、皆様の投稿をすべて掲載できるわけではないことは、ジレンマとして心苦しく感じています。情報発信という点では国内向けに和文誌「日本生理人類学会誌」も発行しています。こちらへの論文投稿も是非ご検討ください。その他、PANews やホームページを通して会員の皆様にとって有益な情報を発信していきたいと思えます。

本学会の特徴として、学会を支える理事の専門が多様であることがあげられます。学会の様々な活動は約 30 名の理事を中心に支えられています。しかし、学会の運営活動とは別に、理事がどのような専門を持っていて、どのような研究を行っているのか、会員の皆様にはなかなか伝わらないのが現状です。これはとてももったいないことだと感じています。具体的な専門は、体温調節、睡眠・生体リズム、運動、自律神経機能、感性・脳機能、公衆衛生、看護、労働、リハビリテーション、栄養、発達と成長・加齢、遺伝、光・温熱・気圧・木材環境、被服、気候変動などとても多岐にわたっています。代議員の方も含めるとさらに多様性は増します。これらの専門が、学会を通して様々な形で刺激し合いながら結び付き合うのが、本学会の特徴です。今後は、今まで以上に理事・代議員の顔(研究内容)の見える学会を目指したいと思えます。

その他にも本学会では、研究部会、資格認定、PA デザイン、若手の会、学会各賞選考、国内外の他学会との連携など、様々な活動を行っています。学会会員には大学、公的機関、企業、NPO、学生など様々な方がおられます。

これらの活動によって、一人でも多くの方が本学会に入会してよかったと思えるように、安心して大会に参加し、多くの満足が得られるように、魅力ある学会を目指していきたいと考えています。引き続きよろしく願いいたします。

■生理人類学あれこれ(5)

「黎明期からの英文誌編集あれこれ」

安河内朗(九州大学)

本学会英文誌である Journal of Physiological Anthropology (JPA) が発刊されて今年で 40 周年を迎えます。当初から関わったものの一人として、英文誌編集の黎明期からの流れの概要を私なりの思いも含めて、またひとつの記録としてもここに留め置きたいとの考えで記してみました。すべての議事録が揃っているわけではなく、記述に誤りがあるかもしれません。何かあればご指摘ください。ここでは、主に黎明期の編集作業および Index 掲載やオープンアクセスまでの過程などに少し力点をおいてみました。

生理人類学懇話会が発足したのは 1978 年です。1981 年に創刊された会報「独楽」は、若手研究者を中心とした会員同士の情報交換の場でした。これはその後の PANews につながっていきます。しかし一方で、3 年目を迎える生理人類学懇話会の機関誌的役割を果たす会報の創刊が求められ、1982 年 7 月 24 日にそのための第 1 回の編集委員会(以降委員会と表記)が招集されました。昭和大学医学部衛生学教室で開催された委員会では、栃原裕編集委員長をはじめとする勝浦哲夫、大越有近、他谷康、沢田晋一、安河内朗が委員として集合しました(他の就任委員は、大中忠勝、中山真智子、山崎和彦、横山真太郎)。その後同年 9 月までの 3 回の委員会を経て、名称も“会

報”から“会誌”に改め、同年 10 月 1 日に記念すべき「生理人類学懇話会会誌」の第 1 号が創刊されました。会誌は 8 ページからなり、内容は「ごあいさつ」(吉田敬一)、「会発足の経緯」(菊池安行)、「会誌発刊に寄せて」(佐藤方彦)に続き、第 8 回生理人類学懇話会話題提供要旨、文献紹介などでした。この創刊を終えた直後の委員会では、会員の業績になるような査読付き論文を掲載すべきとの意見が出て、すぐさまこちらに舵をきっていくこととなります。引き続き 10 月と 11 月の委員会で、翌 1983 年以降の発行については表紙に巻号を付し、第 2 巻第 1 号として再出発して、和名を「生理人類学研究会会誌」(1982 年 10 月の時点で生理人類学研究会に改称)、英名を「Annals of Physiological Anthropology」として、和文もしくは欧文(英、独、仏;のちに英文のみとなる)の原稿を受け付けることとなります。JPA の 40 周年はこの Vol.2 No.1(1983 年)からカウントしています。新しく会誌を出版するにあたって表紙のデザイン、活字の字体と大きさ、レイアウトを決め、原稿は総説、原著論文、報告、資料、技術報告、雑報とすることが決まりました。また文献表記方法、投稿規定、査読体制、校正回数、著者負担金、発行回数、発行日などが一気に議論され決まりました。あとは逐次改善していくこととなります。1982 年 12 月の委員会では編集委員も増員されます。さて、熱き思いはあってもしばらくは原稿の投稿は望めません。したがって委員内で論文投稿の依頼を手分けしたり、自ら執筆してまさに自作自演の自転車操業に突入していきます。第 1 回の委員会が開催された 7 月から同年 12 月までに 8 回の編集委員会を重ね、産みの苦しみのものはありませんでしたが、生理人類学のオリジナルの機関誌を自分たちでつくり、その質

と認知度を高めたいという非常に強い意欲があったからこそ、何度も集まり長時間におよぶ議論をすることができました。

1983年では11回の委員会が開催されています。同年9月の委員会では関邦博氏が編集委員長に就任しています。委員会では本誌の質と知名度を高めるために Index 掲載誌への収録にこだわりました。10月の委員会では Current Contents (このうち Biology & Life science 分野の Index 掲載を目指す - のちに Web of Science に収録)、Index Medicus などのデータベースへ掲載するための調査および申請の手続きを進めることとなります。また、第4種学術刊行物の申請、投稿規定や査読プロセスの追加・修正、有料広告の拡大、国内外用の広報リーフレット、海外会員の年会費、海外編集委員の招へいなどが審議されました。1984年になると、海外との雑誌交換、団体会員の拡大、Index 掲載の申請拡大、海外編集委員の拡大などが図られます。1984年には Excerpta Medica、1985年には Index Medicus、Ergonomics Abstract、JICST、1986年には BIOSIS に収録され、その後 MEDLINE、PubMed、Scopus、J-STAGE、JDream-II などが追加されていきます。しかしながら、私たちが最もこだわった Web of Science への収録には後々まで難を極めました(後述)。この間、栃原裕氏が編集委員長に就任しています。

1990年代に入ると、英文誌タイトルや表紙デザインの再考について検討が始まり(1993年)、これまで和文、英文が混在していた雑誌の完全英文化に向けて準備が開始されます(1994年)。誌名については、基礎系と応用系の研究分野を示すような表現に議論が分かれ、なかなか決まりませんでした。結果は、1994年5月の委員会にて、第2案としてあげられた

APPLIED HUMAN SCIENCE and Journal of Physiological Anthropology (1995年から変更)が過半数の支持を得て決定されました。結局のところ、会員の専門分野が多様で幅広く、そのために基礎系と応用系の両方を含む表現が選択されたこととなります。ヒトの生物学的な特徴を探求し、その成果を人の生活の場に応用しようとする生理人類学の特徴の所以といえます。しかしながら誌名の議論はその後も続き、2000年の Journal of PHYSIOLOGICAL ANTHROPOLOGY and Applied Human Science を経てやっと現在の Journal of PHYSIOLOGICAL ANTHROPOLOGY に落ち着いたのは2006年からでした。1994年6月の委員会では、Elsevier 社に編集から出版までの代行を依頼することが検討され申請しますが、採択されませんでした。完全英文化となった1995年の5月になると、これまで採択されてこなかった Current Contents に対して本誌同年4号までの4冊を審査対象として再度申請を試みることとなります。同年7月の委員会から、栃原裕氏と赤松隆氏の二人の編集委員長体制(1996年まで)となり、また編集事務をアイベックに委託することが決まりました。1996年では Vol.15 No.3 より PANews を英文誌に折り込み形式で発行することとなります。同年4月には、著作権について日本複写権センターへ加入することが審議され、その後契約にいたっています。同年10月では、ISI社(Institute for Science Information, Inc.)より Citation Index および Current Contents への掲載不可の報告がありました。度重なる不採択について、WG(勝浦哲夫、高島豊、田中喜代次、安河内朗)で情報収集等の対応が図られます。その後、ISI社より2年後に再検討できるとの回答がありました。1997年から勝浦哲夫氏と安河内

朗の二人編集委員長体制となり(2000年まで)、2001年から勝浦哲夫氏が編集委員長になります。

2003年5月15日、勝浦編集委員長と安河内より Thomson ISI 日本支社(のちの Thomson Reuters 社)訪問の報告があり、SCI (Science Citation Index) への Index 掲載申請に関連して得られた情報の説明がありました。同年7月では2002年のIF仮計算値は0.38でした。またこの頃からオンライン投稿・査読システム(国際文献印刷社が開発)導入の検討が開始されています(のちにシステムの条件が整うまで導入を見送ることになる)。2004年3月では、Springer社の出版請負が検討されています。その後経費のことも含めISIに採択されるまで保留となりました。同年8月、勝浦編集委員長と安河内は再度 Thomson ISI 社を訪問したとの報告がありました。今回の申請で不採択であれば、再申請は2年後になります(結果はたまたま不採択でした)。Thomsonの宮入暢子氏の話では彼女が関係した国内雑誌の採択率は約2割とのことでした。同年12月の委員会では、Vol.24 No.2からJ-STAGEのURLに続けてDOIも記載することになります。2005年6月、勝浦編集委員長の Thomson ISI 社訪問の報告がありました。同年7月、安河内朗が編集委員長に就任します。この委員会でJ-STAGEオンライン査読システムへの切り替えが決まります(2006年8月上旬より試行を経て運用開始)。また誌名を Journal of PHYSIOLOGICAL ANTHROPOLOGYに変更することを理事会に諮ることが決まりました。2007年9月の委員会では、2006年のIF仮計算値が報告され、0.266でした。

2006年8月に勝浦コンサルティングエディターと安河内が Thomson ISI 社の宮入氏を訪

問し、年度内のSCI申請に向けて過去2年間の状況を説明し、アドバイスを受けます。これまでに何度か同社を訪問して明らかになった課題は、1) 雑誌のオリジナリティがあり、その分野のコア雑誌であること、2) 刊行期日が厳守されていること、3) 表紙の情報が明確で雑誌のコンテンツがわかりやすいこと、4) 査読期間や掲載までの期間が短いこと、5) 投稿数やアクセス数が多いこと、6) Editors や投稿者の国際性を備えていること、7) 論文は助成金を得た grant-article が多いほどよい、などが主たるものでした。ちょうどこの時期はまだ誌名が揺れ動いているときでした。頻繁な誌名の変更や略称の不統一は、誌名の取り扱いの曖昧性とそれによる引用の曖昧性につながることも指摘されていました。上記にあげた課題のうち、なかなか解決できないと感じていたのは1)でした。雑誌のオリジナリティは説明できますが、「その分野のコアであること」については生理人類学ならではの問題がありました。生理人類学の研究対象はご存知の通り幅広く、物理的環境要因の影響をはじめこれらの要因を配慮した衣食住、睡眠、快適性、労働、体力、病気、老化などの多様な分野があり、さらにそれらの研究内容はヒトの生物学的特徴との関係におよぶため、JPA への投稿者の専門分野は多岐にわたります。したがって先に並べた各分野のどれをとってもコアになるとはいえません。また生きた人間を主たる対象とする生理人類学は、人類学分野のコアでもありません。さらには類似する分野とさえいえる Human biology や Biological anthropology についてもコアとはいえません。それというのも生理人類学はそれらの分野と比べるとむしろ大きく異なるオリジナリティがあるからです(詳細はJPA2023;42:3を参照)。ですからSCI申請にあたっては以上の説

明を踏まえて、生理人類学が独立したひとつの分野とし、「JPA は生理人類学のコアである」と言い切ることにしました。繰り返しになります。日常の生活環境における人を扱う学問領域はたくさんありますが、生理指標を測って何らかの適応評価あるいはそれを視野に入れた論文は JPA に投稿されます。ですからさまざまな分野から JPA に投稿があること自体も特徴になります。またこういった投稿者がそれぞれの分野で他の雑誌に論文を書けば JPA から引用するので引用される分野がひとつに集中することもなく、これも他雑誌にない特徴になります。以上を勘案して種々のデータを示しながら、編集委員みんなの意見を反映して 2008 年に申請し、やっとの思いで採択されました。1983 年 12 月から Current Contents 収録のための調査を開始して以来実に長年の夢が叶ったようで、感慨深くもありホッとした次第です。Web of Science への収録は 2010 年に開始され、そして 2013 年に初の IF が付きました。IF は 0.632 でした。そして現在(2023 年 6 月 27 日)の IF(2022 年)は、ついに 3.10 に到達しています。

さて 2010 年頃から Elsevier 社や Springer 社などを参考に電子投稿システムへの移行が検討されます。2011 年 6 月には発行も含めて電子投稿システムの選定が検討され、Editorial Manager (Springer)と ScholarOne (Thomson Reuters)が候補になります。同時に冊子体の廃止も検討されます。同年 8 月、Springer 社の BioMed Central (BMC)から招いた 2 名の担当者による編集業務、Open access、電子投稿システムの説明がありました。その直後に開催された委員会にて、システムは BMC の Editorial Manager に移行すること、冊子体を廃止することが決まりました。同年 11 月には、BMC への

移行について、受付・審査中の論文の取り扱い、冊子体廃止にともなう購読会員の取り扱い、国際文献印刷社の編集業務との仕分け、BMC との業務契約、投稿料(APC)、BMC への支払方法、システムのカスタマイズ、新しい投稿規定や編集体制などについて審議しました。2012 年からはいよいよ本格的に BMC の電子投稿システムに切り替わっていきます。

2012 年 6 月には科研費研究成果公開促進費「国際情報発信強化 B」へ 5 年計画で申請することが決まりました。これはのちに 2013 年単年度の条件で採択されました。採択年度前の 2013 年 2 月の編集委員会では初の合宿が淡路島で実施されました。ここでは事前に出された国際情報発信強化のためのいくつかの宿題について議論し、皆で共有していきました。これらを踏まえ再度 2014 年度以降の「国際情報発信強化 B」を申請しましたが、残念ながら不採択に終わりました。しかし次の年(2014 年)の申請を終えて 2015 年 2 月には沖縄で合宿セミナーを実施し、国際展開の詳細について検討、整理をしました。2014 年の申請は採択され、2015 年度から 2019 年度までの 5 年間の実施が決まりました。2013 年の単年度と併せてこの 5 年間の取り組みでは、アジアを中心としながら欧米も含めてジョイントのシンポジウムや発表セッションを数多く実施し、また若手を含む国内外の著名な研究者の招へい論文や総説を掲載しました。このような編集委員一丸となった取り組みのおかげで、生理人類学および JPA の拠点を形成、展開するのに大きく貢献できたと思います。ちなみに 2013 年の IF は 1.16 でしたが、2020 年には 2.867 にまでになりました。なお、2017 年から中村晴信氏が、2021 年から樋口重和氏が編集委員長に就任しています。

さて今後ですが、IF は当初の目標を上回る3に到達したというものの年間の掲載論文数は他の競合雑誌に比べると極端に少なく、これから高い IF を維持しながらいかに国内外から質の高い多くの論文を掲載できるかというミッションがあります。また欧米の Human biology や Biological anthropology の分野と生理人類学の分野とは、お互いの弱みを補完し合うメリットがあります。競争しつつも共創していくための連携や交流をさらに深めていくことが必要でしょう。次の 50 周年までにどのような飛躍がみられるのか期待をしつつ、若い方々の活躍を楽しみにしています。

■フロンティアミーティング(FM)開催報告

西村貴孝(九州大学)

江藤太亮(国立精神・神経医療研究センター)

2023 年 6 月 16 日に日本生理人類学会第 84 回大会・フロンティアミーティング(FM)が開催されました。年次大会に併せて開催される FM としては第 81 回大会以来、4 回目となります。4 大会ともに、会員の皆様から企画を公募する形で開催を続けてきましたが、84 回大会では過去最高となる5つの企画の応募がありました。今回も個性的な 5 つの企画が立てられ活発な議論が行われましたので、ご報告致します。

FM1 では湯田恵美先生(東北大学)によるシンポジウム「AI と愛」が開催され、井上敦志先生(三重大学)、工藤卓先生(関西学院大学)による AI に関連する研究紹介の後、会場からの質問・コメントを交えた活発な議論が行われました。私も拝聴しておりましたが、今年になって大きな存在感を示してきた ChatGPT の利点と限界についてのディスカッションは大変勉強

になりました。また、対話型の AI が自分のパートナー(恋人)になり得るという点について、間違いなく心地よい時間を過ごせるだろうという反面、一般社会に戻れなくなるだろうという危うさも感じました。まさに AI と愛、そこに人類がどう向き合っていくのか、非常に重要な議論であったと思います。

FM2 では不肖、西村(九州大学)が司会を務め、石田悠華先生(東京大学)と安河内彦輝先生(関西医科大学)の 2 名の演者を招き、シンポジウム「産熱と断熱—その多様性と遺伝的背景—」を開催しました。生理人類学、自然人類学において寒冷適応は人類の拡散において必須であり、その遺伝的、生理的メカニズムは活発に研究されています。近年では成人における褐色脂肪組織の重要性とその遺伝的背景に注目が集まっており、そのメカニズムに迫る研究を石田先生には紹介頂きました。一方で、産熱と共に重要であるのが、血管収縮による断熱であり、特に寒冷血管拡張反応(CIVD)については個人差が大きく、その遺伝的要因を探る研究を安河内彦輝先生より紹介頂きました。遺伝学的研究はある程度のサンプルサイズが必要ですが、両先生は多様なアプローチによりその困難を克服し研究を進められています。講演後、会場との質疑応答も活発に行われ、総括として第 84 回大会大会長・前田享史先生(九州大学)のコメントを頂き、盛況なシンポジウムとなりました。



図 1. FM2 でご講演された安河内彦輝先生

FM3「第37回若手研究者講演会」は2部構成で開催され、第1部では赤間章英先生(前橋工科大学)の司会のもと、生理人類学会でご活躍の若手研究者である大橋路弘先生(九州大学)と中本五鈴先生(東北大学)が自身の研究についてご講演されました。お二人とも概日リズムに関する研究を行っており、大橋先生は、光がほとんどない環境で一日過ごすほどのくらい概日リズムが遅れるのか、そして、その遅れ具合の個人差と関連する要因は何なのか、といった点を調査した研究成果についてご紹介いただきました。中本先生は、高齢者における夜間排尿とそれによる睡眠の分断に着目し、日中の光曝露と尿排泄リズムの関連性について実験室実験とコホート研究の両方から得られた知見をご紹介いただきました。第2部では、樋口重和先生(九州大学)の司会のもと、第1部の先生方と同じく概日リズムに関する研究を行っている、池上啓介先生(九州大学)が自身の研究をご紹介いただきました。池上先生はマウスを対象としており、概日リズムの光同調における松果体メラトニンの役割について、網膜の光感受性を抑制する作用があることや、松果体除去マウスがヒトでいうADHD様の行動を示すことなど大変興味深い研究成果をご発表くださいました。ヒトを対象とした研究では絶対できないアプローチ(松果体の除去など)やリズム分野と発達分野を跨ぐような研究内容に、会場からは多くの質問が飛び交い、非常に活発な議論が行われました。ご発表いただいた3名の先生はいずれも概日リズムに関する研究をされていましたが、同じ分野であっても、個人差研究、実験室およびコホート研究、マウス研究など多様な研究手法、視点があることを実感したセッションでした。

FM4では、ものづくり研究部会による、講演

会「工学部における生理人類学視点のものづくり授業の紹介」が開催されました。ものづくり研究部会は生理人類学における基礎的研究に加え、それらを実装に持って行くための応用的研究も盛んに行われています。今回は部会長である下村義弘先生(千葉大学)による「ものづくり生理人類学」というタイトルで講演が行われ、まさに生理人類学におけるものづくりの意義と最前線を紹介頂きました。また古坐優磨先生(千葉大学)には「筋活動可視化のための筋音図測定デバイスの開発」というタイトルで、自身の研究を紹介頂き、実際に筋音図測定デバイスの開発に向けた研究手法やその苦労など、若手研究者のリアルをお話し頂きました。生理人類学は今を生きるヒトのための人類学であり、我々自身を幸せにするには基礎研究だけではなく、ものづくりによって生理人類学を社会実装しなければならないという重要な点を改めて認識できた講演会でした。

FM5では北村真吾先生(国立精神・神経医療研究センター)によるシンポジウム「ヒトが豊かに生きられる環境を目指して—環境と個人に対する生理人類学的検討の試み—」が開催されました。はじめに北村先生より趣旨説明があり、多様な領域の研究者がいる生理人類学会内のコラボレーションを目指したシンポジウムであること、「環境と個人」をテーマにそれぞれの発表者の講演内容の有機的なつながりを強く意識し、複数回に及ぶ発表者間の事前打ち合わせがあったことなどご説明がありました。その後、高倉潤也先生(国立環境研究所)の、地球規模の環境変化(地球温暖化など)の中で個人が豊かに生きていくにはどうしたらよいか、生理人類学ができることは何か、といった問いに対して、江藤太亮先生(国立精神・神経医療研究センター)は体内時計研究の視点

から、江頭優佳先生(国立精神・神経医療研究センター)は神経発達症研究の視点から検討する、といった構成でシンポジウムが進められました。研究分野の異なるそれぞれの先生のご発表が「環境と個人」という一つの軸でつながっており、まさに生理人類学会ならではのシンポジウムであったと感じました。岩永光一先生(千葉大学)の指定発言を皮切りに活発な議論が行われ、大変有意義な講演会であったと感じました。学会内の共同研究への発展を期待したいと思います。

以上が第84回大会のFM報告となります。担当理事として4年間、FMが定着し盛り上がってきたことを嬉しく思う反面、企画が多くなるにつれ会場を分散せざるを得ず、会員の皆様が全ての企画に参加できない状況になってしまった点については申し訳なく思っています。今年度からの新体制では、FMは研究担当理事にバトンタッチとなります。大会に併せて開催されるFMのみではなく、より柔軟に開催されるようですので、FMのさらなる発展・拡大を祈念する次第です。会員の皆様におかれましては、4年間、FMへの企画応募や積極的なご参加、ありがとうございました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

■FMシンポジウム開催報告

北村真吾(国立精神・神経医療
研究センター)

高倉潤也(国立環境研究所)

江藤太亮(国立精神・神経医療
研究センター)

江頭優佳(国立精神・神経医療
研究センター)

生理人類学は今を生きる私たち自身である「ヒト」を対象とした学問であり、人類学の視座

を中心に多くの周辺諸分野のアプローチがとられているユニークな学問領域である。そのため、生理人類学会内におけるコラボレーションは現代生活に潜む諸問題を多面的・包括的に捉え、巨視的な提言を行う可能性を持ちうる。今回、学会内のコラボレーションや社会に対する発信の端緒となることを期して、「ヒトが豊かに生きられる環境を目指して—環境と個人に対する生理人類学的検討の試み—」と題したシンポジウムを日本生理人類学会第84回大会フロンティアミーティングのFM5シンポジウム(6月16日(金)15:00~16:30、司会・オーガナイザー:北村)として開催させて頂いた。

本シンポジウムでは、生理人類学会の多様性を反映するよう様々なバックグラウンドを有する若手・中堅研究者によって講演者を構成し、さらに大局的な視点からの意見を頂くため岩永光一先生(千葉大学)に指定発言を頂いた。シンポジウムのテーマは属人的に決定し、「環境と個人」というキーワードを中心に、気候変動のような地球規模での環境変化も見据えた環境と個人の在り方を題材とした。多様で有機的なつながりを持つ発表と議論を行うため、OneDriveやSlack、Zoomを活用して事前に資料共有やミーティングを複数回実施した。ミーティングは結果的に対面3回、オンライン4回に上った。また、活発な質疑を行うため、オンラインサービスのLiveQ<<https://web.liveq.page/ja/>>を導入し、匿名でのリアルタイム質問を随時受け付け、適宜質問に回答するという形式を採用した。

講演1の「これからの地球環境の変化と個人の生活環境」(高倉)では、気候変動(地球温暖化)に関する様々な影響について概説し、生体リズムや発達障害等の観点も含めて、地球規模で起きる環境変化に関する問題に対す

る生理人類学的な観点からの貢献への期待について講演した。

講演2の「多様な個人が豊かに生きられる光環境を考える」(江藤)では、生物リズムの観点から、気温上昇により日中の屋外活動が困難になった状況における生活リズムや光環境、光に対する生理的応答性の個人差について講演した。

講演3の「認知の多様性を考慮した適応的な環境構築の可能性」(江頭)では、神経発達症における物理的環境に対する認知的多様性と、困難があっても適応しやすい環境づくりの可能性について、生理人類学分野からの解決の可能性を含めて講演した。

指定発言として岩永光一先生からは、「個人」や「多様性」といったキーワードが生理人類学的であるとの発言を頂いたとともに、講演者それぞれの「個人」に対する考えについての質問を頂いた。また、参加者からはヒト本来の労働の在り方や個人と全体の関係性、省エネルギーの観点、地域格差といった全体的な話題や各講演内容についての個別具体的なものなど LiveQ を介して多くの質問やコメントが寄せられ、それに応じる形で活発な議論が交わされた。

本シンポジウムを通じて、生理人類学会の多様性や社会的課題に対するユニークな貢献の可能性を感じることができた。現在、講演内容を具体的な共同研究課題とするための取り組みを開始している。今後、このシンポジウムを契機とした取り組みが学会内コラボレーションのモデルケースとなり、将来的には生理人類学会発の社会実装につながることを期待したい。

最後に、本シンポジウムにおいて回答しきれないほどの質問・コメントを頂いた参加者の

方々に改めて感謝致します。

■第 84 回大会終了報告

大会長 前田享史(九州大学)

2023年6月16日(金)～18日(日)に日本生理人類学会第84回大会を九州大学西新プラザで開催しました。コロナ禍により81回大会と82回大会はオンライン開催となり、83回大会は対面とオンラインのハイブリッドで開催されていました。本84回大会は4大会ぶりの完全対面および懇親会開催として企画して参りました。6月開催のため天候が心配でしたが、両日とも天候にも恵まれ、大会参加者はコロナ禍前のレベルと同等の193名、懇親会参加者は94名と沢山の参加者に恵まれました。

今大会では一日目にはフロンティアミーティング企画として応募された5企画(3シンポジウム、2講演会)が開催され、それぞれの企画者によって運営され、いずれも活発な議論がなされました。二日目には「AIと生理人類学」をテーマに学会企画シンポジウムが企画されました。今後人工知能は人類の生活にどのように関わっていくべきか、人工知能が欠かせない社会における生理人類学の役割とは何かについて考えるきっかけになりました。二日目には第18回人類学関連学会協議会の合同公開シンポジウムとして「ストレスを考える」が企画され、日本人類学会、日本文化人類学会、日本民俗学会、日本霊長類学会、日本生理人類学会からそれぞれ、ストレスを専門に研究されている先生方にご登壇いただきました。進化、生理、文化などの面から見たストレスについて講演され、様々な立ち位置からストレスを考えるにあたっての視点を得る良い機会となったのではないのでしょうか。このシンポジウムは会場とオンラインでのハイブリッドで一般公開され、会

場はほぼ満席で、オンラインでの参加者は 20 数名でした。

一般の発表は一般口演 22 演題、ポスター発表 37 演題の計 59 題で、生理人類学らしく多様な分野からの興味深い演題が集まりました。ポスター発表は1分間のフラッシュトークをメイン会場で行い、その後ポスター前での討論を奇数演題と偶数演題を入れ替える形で2セッション行いました。口演、ポスター問わず、とても熱心なディスカッションが行われました。

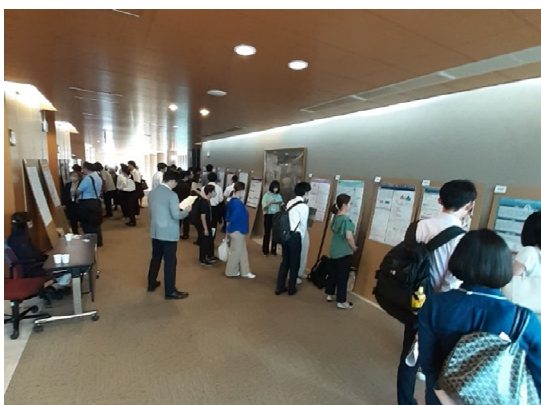


図 2. ポスター会場の様子

4大会ぶりの懇親会ということで当初は豪勢にホテルなどでの開催も考えましたが、せつくなので印象に残る会場を探しまわり、最終的にももち浜の会場に決めました。しかし、懇親会場近くで開催されているアイドルグループのコンサートと終了時刻が重なると帰りの交通機関が麻痺する可能性が懸念されました。結局、借り上げバスを手配することで解決しました。結果的に、多くの方からお褒めのお言葉をいただき胸をなでおろしたところです。対面での議論や懇親会での親睦など、オンラインでは味わえない良さがあったのではないかと思います。対面での活発な議論や交流が行われたことで、本大会が皆様にとって新しい発見と

出会いの場になり、記憶に残る大会になっていましたら幸いです。



図 3. 懇親会場からの夕日

また、今大会初めての会員サービスの試みとして、大会期間中のキッズスペースの設置、大会終了後に概要集を学会 HP のマイページに掲載することを行いました。大会に参加できなかった会員の方々も[マイページ](#)から概要集がご覧いただけますので、ご活用ください。

大会運営側で今回最も苦慮し、力を入れて取り組んだのは懇親会だったかもしれません。

最後に準備の段階も含め、この大会を成功に導いてくれた実行委員の方々、学生スタッフの方々、協賛いただいた企業の方々に深くお礼申し上げます。また、ご発表いただいた方々、参加していただいた方々、関連するすべての方々に心より御礼申し上げます。次の 85 回大会でお会いできることを楽しみにしています。

■第 83 回大会優秀発表賞受賞者のことば

2023 年 6 月 16 日～18 日に、九州大学西新プラザを会場に日本生理人類学会第 84 回

大会が対面式で開催されました。中日の 6 月 17 日夕刻には、ももち海浜公園のイタリアンレストランで、実に 4 年ぶりに懇親会が開かれました。その席上で、2022 年 10 月末に京都大学で開催された第 83 回大会において優れた研究発表を行った 5 名の若手研究者に、優秀発表賞が授与されました。PANews 編集担当 (PAN) は受賞者のみなさんにインタビューを行いました。



図 4. 表彰式の様子

(PAN) このたびの受賞、誠にありがとうございます。まずはご自身のお名前と所属、受賞対象の研究発表のタイトルなどを教えてください。(Please tell us your name, affiliation, title or grade, and the title of the research presentation for which you received the award.) (Keneth Bautista Sedilla; 以下、Ken) Current Affiliation: Department of Human Life Design and Science, Faculty of Design, Kyushu University, Academic Researcher. (3rd year doctoral student, at the time of my presentation.)

Title of the oral presentation: Autonomic thermoregulatory responses and subjective thermal perceptions leading up to and upon the initiation of thermoregulatory behavior during passive exposure in a hot and humid environment.

(西村) 労働安全衛生総合研究所の産業保

健研究グループと過労死等防止調査研究センターで研究員をしている西村悠貴です。「模擬的夜勤時のセルフモニタリングとクロノタイプとの関連について」という題目でポスター発表を行いました。これは現在の所属に移ってからすぐに始めた研究ですが、その前まで学生として所属していた九州大学の樋口重和教授やそのラボメンバーに共同研究として多大なるご協力をいただいで実施しました。この場を借りてお礼申し上げます。

(上村) 九州大学大学院統合新領域学府、修士課程 2 年の上村結芽子です。研究発表のタイトルは、「ピクトグラム内の人の有無が観察時の脳活動に与える影響: 子どもと成人の比較」です。この度は名誉ある賞をいただき、誠にありがとうございます。

(坂口) 東京大学大学院農学生命科学研究科博士後期課程 1 年(発表当時、修士 2 年)の坂口大和です。「視覚・触覚複合刺激による中学生の各種内装材料の評価」というタイトルでポスター発表を行いました。今回、このような名誉な賞を賜り、大変光栄に思います。

(齊藤) 九州大学大学院統合新領域学府ユーザー感性学専攻修士 2 年の齊藤和磨と申します。口頭発表のタイトルは「ウェアラブル端末と 1ch 脳波を用いた機械学習による睡眠段階推定に関する研究」です。

(PAN) 研究内容を高校生にもわかるようにコンパクトに説明していただけますか? (Could you give us a brief description of your research so that high school students can understand it?)

(Ken) Thermoregulatory behavior refers to the actions that individuals take to regulate their body temperature in response to changes

in the surrounding environment. When our body gets too hot or too cold, we naturally engage in behaviors to help regulate our temperature and maintain comfort. Essentially, it's the way we help our bodies stay at the right temperature for optimal comfort and functioning.

Our research investigates the physiological mechanisms underlying the initiation of thermoregulatory behavior (local cooling behavior) as the human body copes with heat stress during passive exposure to a hot and humid environment. We analyzed the recruitment of autonomic thermoeffectors (automatic and involuntary processes that our body's nervous system controls to help regulate our internal temperature) with respect to the changes in subjective thermal perceptions before initiating thermoregulatory behavior.

This study demonstrates that when resting, humans are given the opportunity to behaviorally thermoregulate in a hot and humid environment; changes in skin blood flow and a significant increase in sweat rate are not required for thermal behavior to be initiated. An increase in mean skin and core body temperature, which appears to cause an increase in thermal discomfort, precedes the decision to thermoregulate behaviorally. Lastly, the findings suggest that thermoregulatory behavior initiation in the humid heat follows the concept of orderly recruitment of autonomic thermoeffectors.

We believe that the knowledge regarding the mechanisms and modulators of thermal

behavior in humid heat is essential in light of forecasts that the frequency and duration of intense humid heat will rise in the coming years. In addition, understanding the mechanisms and mediators of thermoregulatory behavior in humid heat has significant implications for populations with impaired regulation of sweating and/or altered control of skin blood flow (i.e., older people, burn survivors, diabetics, etc.).

(西村) 徹夜だけでなく夜間交代勤務でも、ヒトの認知・作業パフォーマンスに悪影響があることが知られています。また、そうやって様々な要因で変化する自分のパフォーマンスを自身で認知することをセルフモニタリングと言います。本研究では個人のクロノタイプ(朝型夜型)によって、模擬的夜勤中のセルフモニタリング成績の変化が異なることを報告しました。具体的には、朝型の方々は徹夜後の朝方の時間帯にセルフモニタリング成績が悪化していました。

(上村) ピクトグラムの理解のしやすさについて、脳波の計測結果から客観的に検証する試みがあります。本研究では、理解能力・脳機能ともに発達段階にある子ども群も対象に、成人群と照らし合わせた検討を行いました。結果、子どもは成人に比べて視覚野に頼ってピクトグラムを観察していた可能性が示されました。

(坂口) 木材はヒトに良い影響を与えると考えられています。子どもに関して、その科学的根拠を示すために、木材を基本として、それぞれ5種類の材料群からなる「素材」、「表面処理」、「樹種」の3つの材料グループについて、それぞれ触り心地の観点から好ましさを調べました。さらに「素材」については、触り心地のみ、見た目のみ、見ながら触る、の条件で印象を調査し、

比較検討しました。

(齊藤) この研究は、多数の脳波や筋電で決定される睡眠段階を1電極の脳波と他の生理指標(脈拍数など)から推定したものです。どんな生理指標が睡眠段階と関係があるのか、睡眠の個人差は推定の手がかりとしてどれほど有用なのかを機械学習を用いて検証しました。結果は80~90%程度推定ができ、人により睡眠段階を反映する生理指標が異なることがわかりました。

(PAN) 研究を進める上で何が大変だったか、苦労話(論文にならない部分)をお願いします。(Please tell us what was difficult for you in conducting your research and your difficulties (these are the parts that will be not written in the paper.)

(Ken) As a doctoral student who began conducting research at the start of the Covid-19 pandemic, I encountered various difficulties that posed significant challenges to my research experiments. However, I was fortunate enough to have a supportive supervisor, Prof. Takafumi Maeda, who played a crucial role in helping me navigate these difficulties. Here are some of the key difficulties I encountered: Laboratory Access and Restrictions: One of the most significant challenges was the limited access to our research laboratory. With restrictions in place, I couldn't conduct my experiments as planned, thus, delaying the progress of my research. Also, I had to reconsider and make necessary adjustments to my research protocol due to the limitations imposed by the pandemic. Participant Recruitment: Recruiting participants for my experiments became a

major hurdle. With social distancing measures, safety concerns, as well as the nature of my experimental conditions (hot and humid condition), it wasn't easy to find individuals willing to participate in my experiment.

Despite these challenges, the experience taught me to be flexible, resourceful, and innovative in adapting to unexpected circumstances. It also highlighted the importance of resilience and finding ways to maintain a productive and positive mindset even when faced with obstacles.

(西村) 遠隔地である九大との共同研究であったこと、そして2年目から新型コロナウイルス感染症に伴う外出制限などで実験も影響を受けた点では(おもに九大のメンバーが)苦労しました。今思えば、チームで研究を実施することをポストクの早い段階でできたことは、ありがたい経験だったと思います。

(上村) コロナ禍での実験ということもあり、小学生の参加者募集・実験実施で難航しましたが、指導教員の先生はじめ研究室の方々、周りの皆様のおかげで、無事に実験を完了させることができました。

(坂口) 実験は中学校の授業時間中に1クラス1コマをお借りして実施したので、授業(実験)準備と当日の時間配分が大変でした。特に、1クラスを相手に生徒たちが集中して回答できる授業の雰囲気づくりがとても大変でした。質問紙ベースでの回答でしたので、大学に戻ってからの集計作業も枚数が多くて、回答のデータ化には骨が折れました。

(齊藤) 睡眠段階のラベル付けが大変でした。7時間程度の睡眠時脳波を30秒ずつに分け、その一つ一つを目視で確認しなければならず、その作業が被験者の人数×2夜分ありました。

おかげで睡眠段階は脳波を見た瞬間にわかるようになりました。

(PAN) 次は何にトライしますか？(あるいは、進路は？どんな仕事に就きたいですか？)
(What will you try next? (Or, what is your career path? What kind of work do you want to do?))

(Ken) I plan to explore postdoctoral or academic positions and research opportunities in Japan or abroad. This would allow me to delve into more specialized areas of environmental ergonomics / physiological anthropology and collaborate with experts in the field.

(西村) 少しでも働きやすい社会の実現に貢献できるよう、引き続き労働衛生研究の立場から取り組んでいきたいと思えます。最近セルフモニタリングに関する研究に加えて、暴言暴露(音環境)の影響についても研究を初めたので、こちらが良い成果が出せたら良いなと考えています。

(上村) 現在は、呼吸の変化が表情の認知活動に与える影響について研究しています。また、来年から鉄道業界に就職し、大学で学んだ研究活動のプロセスも活かしながら、多くの人の心豊かな暮らしの実現に貢献できるよう励んでまいります。

(坂口) 私は子どもの well-being に興味があるので、今後も学校でのフィールドワークを続けていきたいと思えます。特に、子どもと木質空間との関係性のメカニズム解明に向けて、ヒトの五感の観点から幅広いデータを蓄積したいと思っています。今回は視覚、触覚に関して調査したので、次は嗅覚に関するデータを蓄積したいと考えています。

(齊藤) 来年からは自動車の開発に携わりま

す。人と車のコネクションに関わる仕事をするため、こちらの学会で学んだことがダイレクトに役立つと思います。人が使いやすく、人の可能性が広がるような自動車開発にトライしていきます。

(PAN) ご回答ありがとうございました。今後のご活躍と、生理人類学分野の夢が広がるよいデータを沢山示してくださることを期待しています。このたびの受賞、改めておめでとうございます。

■第85回大会(杏林大学)案内(第1報)

大会長 跡見友章(杏林大学)

下記の通り85回大会の詳細をご案内いたします。なお、同内容は学会HPの[85回大会案内第1報](#)に掲載していますので、ご参照ください。皆様のご参加をお待ちしております。

- 1) 会期:2024年6月14日(金)~16日(日)
- 2) 会場:杏林大学井の頭キャンパス
(東京都三鷹市下連雀 5-4-1 :
<https://www.kyorin-u.ac.jp/univ/access/inokashira.html>)
- 3) 開催形式:対面開催を予定しております
- 4) プログラム概要(予定):
 - 6月14日(金)
第85回大会フロンティアミーティング
 - 6月15日(土)
日本生理人類学会第85回大会
一般口演、ポスターセッション、特別講演
シンポジウム1、懇親会ほか
 - 6月16日(日)
日本生理人類学会第85回大会
一般口演、ポスターセッション
シンポジウム2、ほか

■学会動静

- ・日本生理人類学会第 85 回大会
大会長: 跡見友章(杏林大学)
会期: 2024 年 6 月 14 日(金)～16 日(日)
会場: 杏林大学井の頭キャンパス
-

編集後記

今回から新体制で PANews の編集を担当させていただくことになりました。今回は樋口新会長の挨拶と安河内前会長による「生理人類学のあれこれ」、第 83 回大会の優秀発表賞受賞者へのインタビュー、更には第 84 回大会に関する記事を掲載することができました。ご執筆いただいた先生方にこの場をお借りして感謝いたします。今号では樋口新会長の挨拶をはじめ、そのお弟子さん達を中心に次世代の先生方が活躍されている優秀発表賞受賞者やフロンティアミーティングの様子をお伝え出来たのではないかと思います、私自身、新時代の幕開けを感じます。先日の役員選挙にて役員が一新され、本学会は新たな激動の時代に突入しました。これから 2 年間、本誌を通して会員の皆様へ本学会の“今”を伝えていきたいと思っております。宜しくお願い致します。(小崎)

次号予定

学会各賞の受賞者など
2023 年 11 月末原稿締切(予定)

<p>PANews 編集事務局</p>

<p>小崎智照(福岡女子大学国際文理学部環境科学科) jspa-pr[at]jspa.net</p>
--